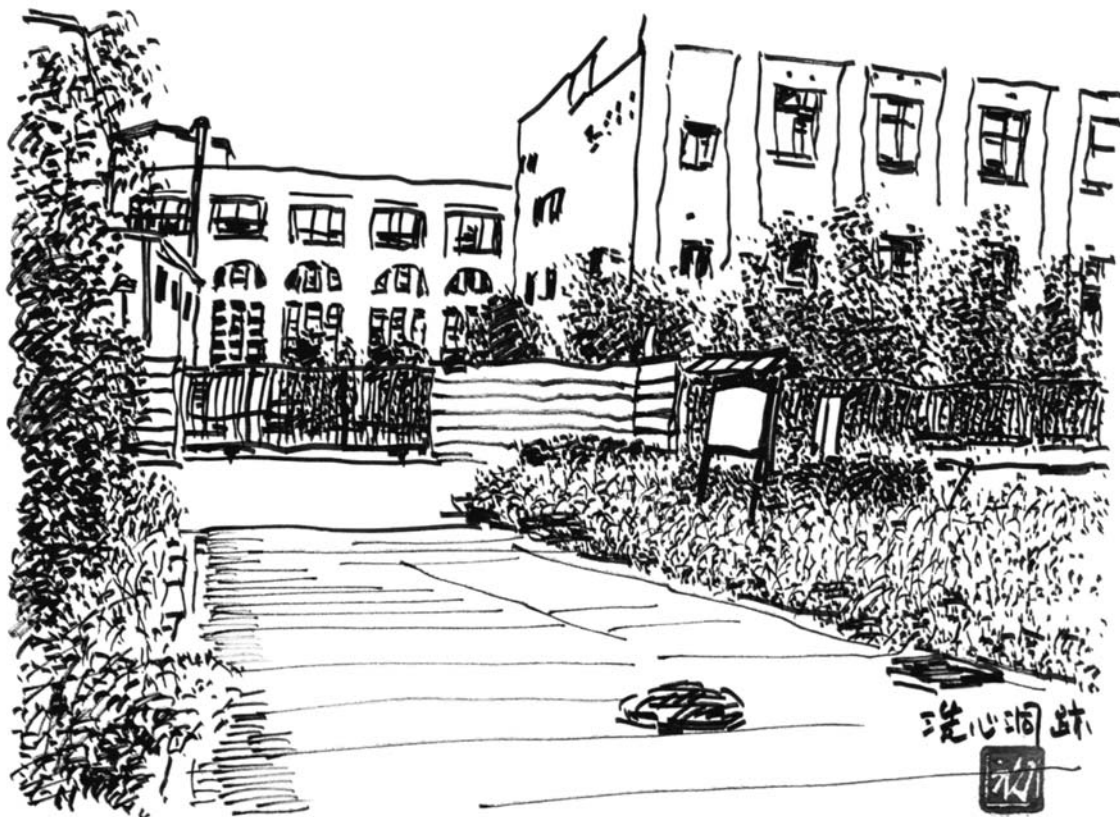


造幣局・洗心洞跡と

陽明学者 大塩平八郎

1771年前の天保8年(1837年)の春、大坂東町奉行所の与力大塩平八郎らは、連年の飢饉に行き倒れや日々の暮らしにあえぐ庶民の前に、浪費する幕府の官財癒着の腐敗に怒り、「救民」の旗をかかげ立ち上がった。これが大塩平八郎の乱である。大塩は与力であるとともに陽明学者であり家塾「洗心洞」を開いた。同じ陽明学者の呂新吾(1536-1618年)の「国民の貧困状態を知れ 災害が続くのに、税はそのまま、流亡の民が増加し、君門は雲の上にいる」「国家財政は破綻 宮殿の造営、災害、無駄な工事」など地方官として皇帝あての上申書「呻吟語」を読み傾倒、「知行合」と「救民」の思想を貫いた。

天保の飢饉は当時人口3000万人のところ100万人が数年にして死亡、大坂も35万人から8・5%減少し明治まで立ち直れなかった。行き倒れ人が町に満ちるのを目の当たりにして、大塩は乱の檄文で政官財癒着の現実を批判、また建議書によって内部告発をした。乱への評価はさまざまだが「身を殺して仁を成す」として、不正を働く者のために年貢徴収機能を止めるなどの官僚社会へ挑戦、民衆を見つめる「民本」の視座など、限界はあるが支配階級の「武士」として政治責任をはたしたため一揆とは違い「乱」と言われている。それゆえ、当時の民衆からは首謀者である彼を「大塩はん」と呼ばれ、京・大津で8割の人々は乱を支持した。大塩の乱の outbreak は現在の造幣局あたりの与力役宅からという。時代はめぐるが、市制119年の歴史をもつ今の大阪市でどんな市民運動が待たれるのだろうか。(N)



画／一水会委員・日展会友 武藤 初雄 「現在の造幣局」